

## 特別な教育的ニーズのある高校生の余暇活動に関する調査研究

三浦 巧也 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所  
 橋本 創一 東京学芸大学教育実践研究支援センター  
 徳増 由季子 世田谷区教育委員会  
 加藤 正和 東京都立大江戸高等学校

**要 旨：**本研究は、チャレンジスクールに在籍する生徒の実態と余暇活動について実証的に明らかにすることを目的とした。全生徒の 7 割以上が過去に不登校を経験している現状が明らかとなった。また、半数以上の生徒が部活動に参加したことがあり、アルバイトを経験し、熱中することに打ち込むための自分自身の時間を積極的に生かして生活していることが示唆された。興味のあることに必要な費用を稼ぐためにアルバイトに精を出す生徒は、自分の時間を積極的に作り出すことに意欲的であり、現在進行中の活動自体から得られる欲求に充実感を味わうことが、学校適応に繋がっているのではないかと推測された。年間 30 日以上欠席する生徒は、友人の人数が希薄になればなるほど、自分の時間に必要性や積極性を感じにくい傾向があることが示された。彼らの学校適応を今後促していくためには、余暇に関する支援を行っていくとともに、自己理解を促す個別のプログラムを展開していくことが急務であると推察された。

**Key Words：** 生徒指導, 特別な教育的ニーズ, チャレンジスクール

### ● I. はじめに

#### 1. 高校生の学校適応について

藤江・藤生(2009)<sup>2)</sup>は、高校生の中途退学・休学・転学等は、個人にも社会にも不利益をもたらす問題であると指摘している。高校生の学校不適応に関する研究では、対人関係およびセルフコントロールに関わる自己効力感が、不適応傾向のタイプの半数以上を有意に予測することが明らかとなった(藤江・藤生, 2009)<sup>2)</sup>。臼井(2000)<sup>24)</sup>は、学校不適応感として「辞めたいと思ったことがある」という指標に関して、心理的ストレス、不満の強さが影響している事を示した。竹綱・鎌原・小方・高木・高梨(2009)<sup>22)</sup>は、学校適応には、学校満足度が影響していることを示した。藤原・河村(2007)<sup>4)</sup>は、高校生において、ソーシャルスキルが変化すると学校適応感も変化することを示した。大久保・菊池・堀・江村(2009)<sup>20)</sup>は、新しい環境に適応するためには、これまでに獲得してきたスキルをうまく修正することが重要であることが示唆された。また、興津・水野・吉川・高橋(2006)

<sup>26)</sup>は、高校生までに不登校を経験した大学生を対象に調査を行った結果、不登校の回復過程には、①自己受容・自尊心の回復、②自他への信頼感の回復、③現実の対人関係の回復があると考えられ、学校嫌い高群は①の途中であり、学校嫌い中低群は②から③にいないのではないかと推測した。

中学生時代との関係性を示した研究では、高校入学前の中学 3 年生に進路意識と学校の適応状態について調査を行い、個人特性のパターンについての検討を行い、高校進学後に個人の特性パターンと学校適応との関連について調査を行った結果、中学校における指導や高校での学校適応の指導の介入として、生徒の自己効力を高めるソーシャルサポートの充実が重視されることを指摘した(古川・松川・浅川・上地, 2001)<sup>3)</sup>。また、高校入学後の適応に関しては、学習意欲や進路意識、教師関係が影響していることを示唆した。永作(2009)<sup>17)</sup>では、教師が生徒の自律性を支援するように働きかけることが、「高校に行く意味が分からない」と言った無動機状態を低減することが示された。石本・久川・齊藤・上長・則定・日潟・森口(2009)<sup>6)</sup>

は、女子中学生と女子高校生に対して調査を行った結果、心理的距離は近く、同調性の低い友人関係をとる生徒は、心理的適応・学校適応ともに良好であった。高校生で同調性の高い密着した友人関係を取る生徒は、学校適応は良好でも、心理的適応は不適応な結果を示した。女子高校生では同調的ではない友人関係を持つことが心理的適応にとって重要であることが示された。

## 2. チャレンジスクールについて

高校生の学校不適応感、ソーシャルスキルが修正・変化しない状態や、対人関係やセルフコントロールに関する自己効力感の低さが、心理的なストレスを助長することによって生じる可能性が示唆された。また、高校入学前の他者との良好な関係性や、学習意欲、進路意識が入学後の学校適応に繋がること示された(例えば永作・新井, 2005)<sup>18)</sup>。

東京都では、小・中学校時代に不登校を経験した生徒や高等学校を中途退学した生徒を含めこれまでの教育のなかでは自己の能力や適正を十分に生かしきれなかった生徒など、多様な生徒が学校生活を通じて自分の目標を見つけ、それに向かってチャレンジする学校(天井, 2001)<sup>11)</sup>として、チャレンジスクールを設置した(都立高校改革推進計画, 平成9年9月・11年10月)。チャレンジスクールは、単位制であるため無学年制を採択しており、上級学年への進級や上級学年へ進級できないという留年などの考えは無く、単位を修得すれば卒業の重要な要件を満たすこととなる。

チャレンジスクールの生徒を対象とした研究は少なく、伊藤(2009)<sup>7)</sup>は、森田(1991)<sup>14)</sup>のボンド(社会に対する個人の絆)を援用し、不登校経験のある生徒の登校継続には、ボンドの変化が大きな意味をもつこと、また、対人関係によるボンドを強固なものにするため、教師の直接的・間接的なサポートや「痛み」を共有する生徒集団が重要な役割をはたすこと、そして教師と生徒との良好な関係が生活指導や学級集団の重視という学校の実践が浮浪校の原因となることを回避させるはたらきを持つことを示した。生徒たちは、「通える理由」として、対人関係に依拠したものが大多数を占めていた。しかし、卒業後の場では対人関係によるボンドの形成によって就業・就学の継続支援が支えられないことが課題であり、対人関係以外のボンドの形式を重視した登校支援(例えば、手段的自

己実現によるボンド・現在進行中の活動自体から得られる欲求充足など)をしていくことが急務であることを指摘した。

## 3. 余暇活動について

保坂(1996)<sup>5)</sup>は、中学校でドロップアウトしてしまった不登校生徒にとって、進路指導は単なる進学指導や就職指導にとどまらず、その後の生き方を考えるための本来の進路指導が重要であると示した。生徒一人一人の生き方を指導していくための進路指導は、生徒指導に内包されている。ところで、生徒指導の領域の一つに余暇指導がある。余暇活動は、人間性を豊かにする貴重な時間であり、生徒に対して、余暇活動の重要性を自覚させ、余暇を価値あるものとして、よりよく活用できるように指導・援助することが大事である(松井, 2006)<sup>31)</sup>。

西川・渋谷(2010)<sup>19)</sup>は、活動が人々の心身の健康にとってポジティブな影響を与える可能性を示唆し、自分自身のための時間(SOT)尺度を開発した。その結果、自分のために時間を使うことが重要だとする「必要性因子」と、自らの時間を作り楽しむ様子がみられる「積極性因子」が抽出された。自分のために時間あるいは使おうとするといった自分の時間に対する態度が、特に精神健康や幸福感といった心理的Well-beingに影響を与えることが示した。このように、余暇指導は進路指導と同様に、一人一人の生徒の健全な成長を促し、将来における自己実現を図る(生徒指導提要, 2010)<sup>13)</sup>ために必要であるのは自明である。

余暇に関する指導及び支援について、伊藤・菅野・橋本・浮穴・勝野・片瀬(2007)<sup>8)</sup>は、知的障害者の余暇支援と社会参加について、知的障害養護学校の高等部を対象に調査を行った。その結果、学校が余暇支援と社会参加に関する取り組みを行っている実態は、生徒にとって卒業後の生活の中で必要であると位置づけられていることが示された。このことから、学校が余暇活動に対して指導や支援を行うことは、手段的自己実現によるボンドや現在進行中の活動自体から得られる欲求充足(森田, 1991)<sup>14)</sup>に影響し、対人関係によるボンド形成以外の形式による登校動機が促進され、学校適応に繋がるのではないかと推測される。

## 4. 本研究の目的

これまで高校生の学校適応に関する研究では、余暇活動に関する実態把握を行った研究は

見当たらない。加えて、余暇に関する研究では大学生や知的障害児者の研究はなされているものの、高校生を対象とした実証的な研究は行われていないのが現状である。そこで、本研究では、高校入学前に不登校を経験した生徒の高校入学後の余暇活動の実態を把握し、登校状況との関係性を検討することを目的とする。

## ● Ⅱ. 調査協力者

### 1. 調査協力者

チャレンジスクールに在籍する生徒にホームルーム等を使用して、自己式質問紙調査を実施した。各項目の欠損値を考慮し、372名の回答を分析に用いた(ただし、質問項目によって回答数は異なる)。

### 2. 調査時期

2010年11月～12月(郵送法にて回収)。

### 3. 調査内容

#### (1) フェースシート

フェースシートには、学年、性別、過去の不登校経験、現在の登校状況、部活動の参加状況、友達の数、アルバイトの有無・日数・金額等を項目として選定した。

#### (2) 熱中していることについて

余暇活動において、全生徒に対して「熱中していることがあると、費用をかせぐためにアルバイトにがんばれる」(5件法)、「熱中していることがある」という項目の得点が高い生徒を対象に、「熱中していることと同じように、勉強もがんばれる」(3件法)の2項目を選定した。また、余暇に費やす日数や内容について、自由記述式の質問項目を作成した。

#### (3) SOT 尺度

西川・澁谷(2010)<sup>19)</sup>が作成した SOT 尺度(5件法)を採択した。第1因子は、自分のために時間を使うことは重要であり、必要だと感じていることが見られる「必要性因子」(6項目)、

第2因子は、自ら時間を作り楽しむ様子が見られる「積極性因子」(6項目)といった2因子(12項目)で構成されている。

## ● Ⅲ. 結果

### 1. フェースシートについて

#### (1) 調査協力者人数について

調査協力者を学年、性別に分けて集計を行った(Table 1 参照)。本調査では、女子生徒の回答の割合が多いことが明らかとなった。また、無学年制であるため、4年生が全体の10%在籍している事が明らかとなった。

#### (2) 過去の不登校経験について

過去(小学校・中学校時代)において、不登校を経験した生徒について、学年に分けて集計を行った(Table 2 参照)。各学年別に不登校経験者の割合を算出すると(不登校経験者数/学年の人数×100)、1年生は73%、2年生は74%、3年生は70%、4年生は61%であった。全体では、76%の生徒が不登校を経験していることが明らかとなった。本研究の調査協力校のチャレンジスクールは、不登校を経験した生徒が全体の7割以上の大多数を占めており、不登校経験のない生徒が2割弱程度入学している事が示された。

#### (3) 現在の登校状況について

現在の登校状況について、「毎日登校している」「週に1回は休む」「週に2～3回は休む」「ほぼ休んでいる」の4件を用いて、学年に分けて集計した(Table 3 参照)。「毎日登校している」と回答した生徒の割合は8割と高い割合を示した。「週に1回は休む」「週に2～3回は休む」「ほぼ休んでいる」と回答した生徒を集計すると、約2割に及ぶことが示された。彼らを1年度単位で計算すると30日以上欠席となり、不登校生徒の対象となる。東京都教育委員会(2011)<sup>23)</sup>は、2010年度の定時制の生徒の不登校数を、全体の65.2%(全日制は60.0%)と公表している。本研究の調査協力校のチャレンジ

Table 1 調査協力者について(N=372)

	男子		女子		計	
1年	34	9%	86	23%	120	32%
2年	44	12%	67	18%	111	30%
3年	38	10%	67	18%	105	28%
4年	18	5%	18	5%	36	10%
計	134	36%	238	64%	372	100%

Table 2 過去の不登校経験者人数(N=347)

	人数
1年	25%
2年	24%
3年	21%
4年	6%
計	76%

Table 3 現在の登校状況(N=325)

	毎日登校	週1回休	週2・3回休	ほぼ休
1年	29%	2%	2%	0%
2年	25%	3%	2%	0%
3年	22%	2%	2%	0%
4年	5%	2%	1%	1%
計	81%	10%	7%	2%

スクールは、東京都の定時制における不登校生徒数よりもかなり少ない不登校生徒数であることが明らかとなった。

(4) 部活動の参加について

高校入学後の部活動の参加について、「現在参加している」「過去に参加していた」「参加していない」の3件を用いて、学年に分けて集計した(Table 4 参照)。「現在参加している」と回答した生徒は高い割合を示した。参加経験者は、約6割となり半数以上の生徒が部活動の経験をしている事が明らかとなった。

(5) 友だちの人数について

現在の友だちの人数について、「多い」「普通」「少ない」「いない」の4件を用いて、学年に分けて集計した(Table 5 参照)。「普通」と回答した生徒の割合は5割以上と高い割合を示した。約7割以上の生徒が高校入学後に友人を作り、人数に関して「多い」「普通」といったポジティブな印象を持っていることが明らかとなった。

(6) アルバイトの経験について

アルバイトの経験について、「現在行っている」「過去に行ったことがある」「未経験である」「親が反対している」の4件を用いて、学年に分けて集計した(Table 6 参照)。「現在行っている」と回答した生徒は、2年生の割合が高いことが示された。このことから、アルバイトの経験は、学校生活に慣れてきたと考えられる2年生の時期に始めることが多いと推測された。

Table 4 部活動の参加状況 (N=323)

	参加	過去参加	不参加
1年	17%	3%	13%
2年	13%	6%	12%
3年	11%	5%	11%
4年	3%	4%	2%
総計	44%	18%	38%

Table 5 友達の数について (N=322)

	多い	普通	少ない	いない
1年	5.3%	18.9%	7.1%	2.2%
2年	4.0%	16.8%	6.8%	2.8%
3年	4.3%	16.5%	5.6%	0.6%
4年	1.2%	4.7%	2.2%	0.9%
計	14.9%	56.8%	21.7%	6.5%

Table 6 アルバイトについて (N=347)

	現在行っている	過去に行っていた	未経験	親が反対
1年	7.5%	5.8%	17.6%	2.3%
2年	12.4%	8.1%	8.4%	0.9%
3年	9.2%	8.1%	9.2%	0.9%
4年	2.9%	4.9%	1.4%	0.6%
計	32.0%	26.8%	36.6%	4.6%

また、アルバイトの経験者は、約6割弱となり半数以上の生徒がアルバイトを経験したことがあることが明らかとなった。

(7) アルバイトの状況について

現在アルバイトを行っている生徒を対象に、アルバイトの勤務について、「平日のみ」「休日のみ」「平日と休日の両方」の3件を用いて集計した(Table 7 参照)。また、「1週間のうち何日勤務しているか」、「一月の収入はいくらか」について質問した。勤務日数は、「4日未満」、「4日以上」の2件に集約した。収入については、学年ごとに平均月収を算出した。それぞれについて、学年別に分けて集計を行った(Table 8 参照)。また、アルバイトの内容についても集計を行った(複数選択可, Table 9 参照)。

調査の結果、平日と休日の両方に勤務している生徒が7割以上と最も多いことが明らかとなった。また、勤務日数は、1週間に4日未満勤務している生徒の割合が最も多いことが示された。平均月収は約5万円弱であった。アルバイトの内容はコンビニエンスストアが最も多いことが示された。

2. SOT 尺度得点と個人的背景との関連について

(1) 熱中している活動について

SOT 尺度の項目である「自由に使える時間に熱中している活動や遊びがある」に「非常に当てはまる」「やや当てはまる」に回答した生徒228人を対象に、熱中していることに費やす日

Table 7 アルバイトの勤務について (N=110)

	平休両方	休日のみ	平日のみ
1年	15.5%	3.6%	2.7%
2年	27.3%	5.5%	4.5%
3年	20.0%	5.5%	3.6%
4年	10.9%	0.0%	0.9%
計	73.6%	14.5%	11.8%

Table 8 アルバイトの勤務日数・月収について

	4日未満	4日以上	平均月収
1年	11.8%	0.0%	37000
2年	22.5%	19.6%	43000
3年	18.6%	14.7%	40000
4年	2.0%	10.8%	74000
計	54.9%	45.1%	48500

Table 9 アルバイトの内容 (自由記述、N=370)

	コンビニ	ファストフード	ウェーター	レジ	弁当	その他
1年	3.2%	3.2%	1.1%	1.1%	0.8%	2.7%
2年	5.1%	6.5%	5.4%	3.8%	2.4%	6.8%
3年	6.2%	5.1%	3.2%	3.2%	0.5%	4.9%
4年	1.6%	1.4%	1.6%	1.4%	2.7%	6.2%
計	16.2%	16.2%	11.4%	9.5%	6.5%	20.5%

について、「平日のみ」「休日のみ」「平日と休日の両方」の3件を用いて集計した。また、「1週間のうち何日費やしているか」、「参加人数(一人または複数人)」について質問した(Table 10 参照)。活動日数は、「4日未満」、「4日以上」の2件に集約した。それぞれについて、学年別に分けて集計を行った。また、熱中している内容についても集計を行った(複数選択可, Table 11 参照)。

調査の結果、平日と休日の両方に活動している生徒が約5割と最も多いことが明らかとなった。また、活動日数は、1週間に4日以上の生徒の割合が最も多いことが示された。また、複数人で活動する生徒が約5割であった。活動内容は音楽を聞いたり、楽器を演奏する等の音楽に関連する活動が最も多いことが示された。

(2) 熱中している活動と学業の関連性について

SOT 尺度の項目である「自由に使える時間に熱中している活動や遊びがある」に「非常に当てはまる」「やや当てはまる」に回答した生徒230人を対象に、「熱中していることと同様に、学習にも意欲的に取り組んでいるか」という質問との関係性についてまとめた(Table 12 参照)。「どちらともいえない」「いいえ」という回答

Table 10 熱中できる活動について (N=228)

	平休両	休のみ	平のみ	4日未満	4日以上	複数人	一人
1年	18.4%	2.6%	1.8%	10.5%	20.2%	15.4%	17.1%
2年	15.8%	3.9%	1.3%	8.8%	16.7%	15.8%	14.0%
3年	13.6%	3.9%	0.9%	9.6%	14.0%	15.4%	10.1%
4年	3.9%	1.3%	0.0%	1.8%	5.7%	5.7%	1.8%
計	51.8%	11.8%	3.9%	30.7%	56.6%	52.2%	43.0%

Table 11 熱中している内容 (N=444)

	音楽	ビデオ	ゲーム	マンガ	PC	スポーツ	絵を描く	読書	その他
	16.7%	13.5%	13.3%	11.0%	10.1%	6.8%	6.3%	5.4%	16.9%

Table 12 熱中していることと同じように勉強も励んであるか (N=230)

	はい	どちらともいえない	いいえ
1年	3.9%	7.8%	7.0%
2年	2.6%	7.4%	8.3%
3年	2.2%	6.5%	4.3%
4年	1.3%	1.7%	2.2%
計	10.0%	23.5%	21.7%

の割合が、2割以上という結果となった。このことから、熱中している活動が、生徒自身の学習意欲を高めることに繋がる可能性は、本研究では認められなかった。

(3) SOT 尺度得点について

SOT 尺度の因子及び各項目の平均得点・標準偏差を示した(Table 13 参照)。本研究では、自分のために時間を使うことは重要であり、必要だと感じている「必要性因子」得点のほうが、自ら時間を作り楽しむ様子が見られる「積極性因子」の得点よりも高いことが示された。

(4) SOT 尺度得点と個人要因との関連性について

SOT 尺度とフェースシート等の個人的要因との関連をみるため、各項目を得点化处理した後相関分析を行った(Table 14 参照)。全生徒を対象とした結果では、SOT 尺度の必要性因子と積極性因子は強い相関関係が示された( $r=.73, p<.01$ )。また、積極性因子は、「熱中していることがあると、費用をかせぐためにアル

Table 13 SOT 尺度について

	項目	平均	SD
<b>SOT 必要性因子</b>			
1	自由に使える時間は気分転換に必要である	4.39	0.96
2	自由に使える時間は充実感を与えてくれる	3.98	1.08
3	自由に使える時間は生きていく上で欠かすとのできないものである	4.28	0.99
4	自分のための時間は大切である	4.39	0.94
5	趣味等の好きなことをすることは価値がある	4.39	0.93
6	自分の好きなことやものに時間をかけることはおもしろい	4.35	1.86
<b>SOT 積極性因子</b>			
7	やりたいことのためには時間を作る	4.01	1.07
8	自由に使える時間を楽しむ仲間は多い	3.39	1.17
9	自由を使える時間を楽しんだ後はすっきりする	3.92	1.07
10	自由に使える時間を作り出すように心がけている	3.63	1.10
11	自由に使える時間に熱中している活動や遊びがある	3.78	1.20
12	忙しいときでも好きなことをするための時間は犠牲にしたくない	3.45	1.21
13	熱中していることがあると、費用をかせぐためにアルバイトにがんばれる	3.47	1.26

※項目13は追加項目

バイトにがんばれる」の項目と中程度の相関関係がみられた( $r=.44, p<.01$ ).

次に、過去に不登校経験のある生徒(全体の76%)のうち、現在毎日登校している生徒群(63.5%)と、週に1日以上休む(年間30日以上欠席)生徒群(17.0%)の2群に分けて相関分析を行った。分析の結果、毎日登校している生徒群は、全生徒を対象とした相関分析とほぼ同様の結果を示した。年間30日以上欠席する生徒群は、全生徒を対象とした結果に加えて、SOT必要性因子と積極性因子において友人の人数( $r=.43, p<.01$ ,  $r=.45, p<.01$ )に中程度の相関関係がみられた。

以上の結果より、本研究の調査協力校であるチャレンジスクールに在籍する生徒は、自分のために時間を使うことは重要であり、必要だと感じるほど、自ら時間を作り楽しむ傾向があることが示された。加えて、楽しむための時間を自らが進んで作り出す傾向が強い生徒ほど、その時間に必要な費用を稼ぐためにアルバイトに精を出すことが示唆された。また、年間30日以上欠席する生徒は、特に、友人の人数が多くなればなるほど自分の時間を必要に感じ積極的に行動する傾向があることが推測された。一方で、友人の人数が希薄になればなるほど、自分の時間に必要性や積極性を感じにくい傾向があることが示された。

Table 1 4 SOT 尺度得点との関連について

		SOT必要性因子	興味のあることをするためにアルバイトを頑張る	友達の人数
全体	SOT必要性因子			
	SOT積極性因子	0.73 **	0.44 **	
毎日登校群	SOT必要性因子			
	SOT積極性因子	0.75 **	0.44 **	
年間30日程度欠席群	SOT必要性因子			0.43 **
	SOT積極性因子	0.71 **	0.50 **	0.45 **

## ● Ⅳ. 考察

### 1. チャレンジスクールに在籍する生徒の学校適応について

本研究の目的は、チャレンジスクールに在籍する生徒の実態と余暇活動について、実証的に明らかにすることであった。全生徒の7割以上が過去に不登校を経験している現状が明らかとなった。しかしながら、高校入学後は、8割以上が毎日登校しており、年間30日以上欠席者は2割に留まっている。また、半数以上の生徒が部活動に参加したことがあり、アルバイトを経験し、熱中することに打ち込むための自分自身の時間を積極的に生かして生活していることが示唆された。

チャレンジスクールは、学校生活を通じて自分の目標を見つけ、それに向かってチャレンジする学校(天井, 2000)<sup>1)</sup>あり、それぞれの学校で様々な特色を打ち出していると聞く。1年生時から、充実した余暇を過ごしていることから、受験をする段階で、事前に学校説明会や学園祭に参加し、高校入学後には新たな気持ちでスタートしたいという自律的な進学動機(永作・新井, 2005)<sup>18)</sup>を高めて入学した生徒が多く存在するのではないかと推測される。また、興味のあることに必要な費用を稼ぐためにアルバイトに精を出す生徒は、自分の時間を積極的に作り出すことに意欲的であり、現在進行中の活動自体から得られる欲求(森田, 1991)<sup>14)</sup>に充実感を抱き、対人関係によるボンダ形成以外の形式による登校動機が促進され、学校適応に繋がっているのではないかと考えられる。

さらに、教職員からの支援や部活動の経験以外にも、アルバイトで実社会を経験したり、熱中できる趣味や興味のあることを他者と共有することを通して、ソーシャルスキルや対人距離が修正・変化することにより、心理的なストレスが軽減され学校への適応感が促されているのかもしれない。今後は、上記の新たな仮説を検証すべく、更なる検証を行っていくことが課題である。

### 2. 特別な教育的ニーズという視点に立った支援について

年間30日以上欠席する生徒は、SOT尺度の因子と友人の人数に中程度の相関がみられた。友人の人数が希薄になればなるほど、自分の時間に必要性や積極性を感じにくい傾向がある

ことが示された。三浦・林安・橋本(2010)<sup>12)</sup>は、自分の苦手な所に気づくことは、中学時代よりも高校時代でより顕著なものとなり、自分自身の苦手さによって、物事がうまくいかず悩んだり、葛藤や不安を抱く傾向がこの時期強まることも指摘している。彼らは、自己受容・自尊心の回復(興津・水野・吉川・高橋, 2006)<sup>26)</sup>以前に、自分自身の特性が分かっておらず、苦手さに関して悩んだり自己違和感に苦しむ経験が乏しいアイデンティティの気づき未熟群(三浦・林・橋本, 2010)<sup>12)</sup>の可能性が示唆される。

また、不登校と発達障害との関連(横谷・田部・石川・高橋, 2010)<sup>25)</sup>について、アスペルガー症候群を有する生徒の不登校の要因として、独特の思考が思春期までに形成されやすく、学年が上がるに従って対人関係が複雑になることによって、破たんをきたす可能性があること(桐山, 2006)<sup>9)</sup>や、LDの疑いのある不登校生徒は、「社会的行動」に弱さがあり、ギャングエイジをうまく渡っていけないことで学校不適応となることを指摘している(中尾・山本, 2007)<sup>16)</sup>。

本研究では明らかではないが、チャレンジスクールの中で学校不適応となる生徒に、特別な教育的ニーズのある生徒(不登校生徒、発達障害や精神疾患のある生徒、心理的な問題のある生徒、またその疑いのある生徒で、一斉指導に加えて、個別に支援を必要とする生徒)(三浦・林・橋本, 2009)<sup>10)</sup>が存在していることは安易に想像できよう。彼らの学校適応を今後促していくためには、余暇に関する支援を行っていくとともに、自己理解(自分の得意・不得意な能力や特性に気づき、自己の問題を改善・軽減していくこと)(三浦・林・橋本, 2010)<sup>10)</sup>を促す個別のプログラムを展開していくことが急務であると推察される。

## 文 献

- 1) 天井勝海(2001): 新しい学校づくりへの挑戦, 駒澤大学教育学研究論集 17, pp61-77.
- 2) 藤江玲子・藤生英行(2009): 高校生のドロップアウトと不適応傾向に関連する要因の研究(1), 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, 286.
- 3) 古川雅文・松川隆夫・浅川潔司・上地安昭(2001): 高校進学に伴う学校適応に関する研究—中学校での進路意識, 学校適応と高等学校での学校適応の関連—, 進路指導研究 20(2), pp1-10.
- 4) 藤原和政・河村茂雄(2007): 高校生のソーシャルスキルの変化と学級適応感の変化についての一考, 日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集, pp20.
- 5) 保坂亨(1996): 不登校生徒の中学卒業後の進路, 日本進路指導学会研究紀要 17(1), pp9-16.
- 6) 石本雄真・久川真帆・齊藤誠一・上長然・則定百合子・日瀨淳子・森口竜平(2009): 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連, 発達心理学研究 20(2), pp125-133.
- 7) 伊藤秀樹(2009): 不登校経験者への登校支援とその課題, 教育社会学研究 84, pp207-226.
- 8) 伊藤健・菅野敦・橋本創一・浮穴寿香・勝野健治・片瀬浩(2007): 特別支援学校における余暇支援と社会参加に関する実態調査, 発達障害支援システム学会 6(2), pp59-64.
- 9) 桐山正成(2006): 思春期において不登校を呈した 7 例のアスペルガー障害の臨床的特徴, 川崎医学会誌 32(3), pp111-125.
- 10) 三浦巧也・林安紀子・橋本創一(2009): 私学中高一貫校における教育相談と特別な教育的ニーズに関する研究, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 5, pp127-132.
- 11) 三浦巧也・林安紀子・橋本創一(2010): 中高一貫校に在籍する生徒の自己理解を促す支援に関する研究, 東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要 6, pp137-143.
- 12) 三浦巧也・林安紀子・橋本創一(2010): 青年期における自己の気づきに関する調査研究—大学生の過去の振り返りを通して—, 東京学芸大学紀要 61(2), pp167-173.
- 13) 文部科学省(2010): 生徒指導提要
- 14) 森田洋司(1991): 不登校現象の社会学, 学文社
- 15) 笠井孝久, 中学生・高校生という時期, 村瀬嘉代子・三浦香苗・近藤邦夫・西林克彦(編)(2000): 青年期の課題と支援, 新曜社, pp2-13.
- 16) 中尾和人・山本晃(2007): LDの観点からみた不登校, 大阪教育大学紀要 55(2), 131-145.
- 17) 永作稔(2009): 自律性支援が高校進学動機に与える影響, 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集, pp615.
- 18) 永作稔・新井耕二郎(2005): 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討, 教育心理学研究 53(4), pp516-528.
- 19) 西川千登世・渋谷昌三(2010): 自分の時間に対する態度と心理的 Well-being の関連, 目白大学心理学研究 6, pp33-42.

- 20)大久保智生・菊池浩史・堀健二・江村早紀(2009): 高校生の学校適応に関する研究: 社会的スキルは後の適応を予測するのか, 日本パーソナリティ心理学会第 18 大会発表論文集, pp42-43.
- 21)松井賢二, 第 1 部 生徒指導, 仙崎武・野々村新・渡辺三枝子・菊池武剋(編)(2006): 生徒指導・教育相談・進路指導, 田研出版, pp40-56.
- 22)竹綱誠一郎・鎌原雅彦・小方凉子・高木尋子・高梨実(2009): 高校生の学校適応に関する縦断的研究: 重要な他者との関係と学校雰囲気の影響, 学習院大学人文 8, pp111-118.
- 23)東京都教育委員会(2011): 平成 22 年度における児童・生徒の問題行動等の実態について, <http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr110804.htm>
- 24)臼井博(2000): 高校生の学校生活の実態と不適応の関連要因, 日本教育心理学会第 42 回総会発表論文集, pp128.
- 25)横谷祐輔・田部絢子・石川衣紀・高橋智(2010): 「発達障害と不適応」問題の研究動向と課題, 東京学芸大学紀要 61, 359-373.
- 26)興津真理子・水野邦夫・吉川栄子・高橋宋(2006): 不登校経験と進学後の学校嫌い感情との関連 2, 聖泉論叢 13, pp39-49.